

多様な素材体験が育てる感覚の基礎と情操

図画工作科における「対話性」

～豊かな感情を育て、イメージを「伝える」ことを意識した表現活動～

上田 恵

◇多様な素材体験が育てる感覚の基礎と情操

素材から発想したり、自分のイメージしたことをどの素材で表現することが適当かなどを考えたりするためには、低学年のうちに様々な素材に出会い、その科学的な特性や図画工作的特性などに気づくことが大切である。そこで、多様な素材に出合わせることと、多様な変化が楽しめる素材としての小麦粉を使って、造形遊びや生活科との合科などの取り組みを進めた。

また、子どもが素材にかかわることで、教師が意図しない素材の価値に子どもが気づいたり、思惑とはちがうことに喜びを感じたりすることが多い。素材体験によるさまざまな気づきを、発せられる言葉を手がかりにしてみとっていった。

◇図画工作科における「対話性」の、学年を通した系統性

特に「他者との対話」において、進んで仲間とかかわり、共感的な関係作りの力を育てていきたい。図画工作科で「他者との対話」というとき、友だちと共同制作をしたり、協力して制作したりすることだと思いがちだが、作品を見る人にどう見せるかを考えた相手意識という「他者との対話」もある。後者の「他者との対話」を実現化していく題材とはどのようなものかを探ってみた。

キーワード 対話性 小麦粉 相手意識 ソーマトロープ

1. 研究の目的

1. 1. はじめに

造形的表現活動の「対話性」とは、学校提案の内容である「3つの対話」、すなわち「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」を、図画工作科の特徴に当てはめたものである。対象とは、素材や主題などを指し、他者とはともに表現活動を行う友だちであったり、表現したものを鑑賞する者であったり、表現したもののテーマやメッセージを伝える相手であったりする。自己とは、表現主体である自分自身を指す。図画工作科では、低学年期には対象にかかわり、働きかける活動が中心課題になり、中学年期には一緒に作る友だちや作品を観る相手を意識した活動も課題とし、思春期前期を迎える高学年期には対象、他者との対話に加え、自己に問いかける活動が課題となるのではないかと考えた。

1. 2. 多様な素材体験

身近で多様な素材体験とは、身近にありながら表現の素材としてはたらきかける機会が乏しいものや、同じ素材でも変化する素材などをふくめる。これらにはたらきかけることで、心地よさを感じたり、素材の特性や感じに気づいたり、素材への認識を高めたりできるのではないかと考えた。

また、こうした体験を通して、手や道具を工夫して使う能力や、好きな色や形を選ぶ力を養い、違った素材を組み合わせさせて使ったり、仕組みを考えてものづくりをしたりしながら、造形的表現活動を楽しむことができるようになるのではないかと考えた。

1. 3. 低学年における「対話性」

学習指導要領では図画工作科の目標を次のように定めている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせなが

ら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」

「感性を働かせながら」という文言は、今回の学習指導要領で新たに加えられた。学習指導要領解説によると「感性」とは、「様々な対象や事象に心を感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なもの」であり、「これを手掛かりに児童は発想をしたり、技能を活用したりしながら、自他や社会と交流したり、主体的に表現したり、よさや美しさを感じ取ったりしている」とある。

本校の学校提案は「学びをデザインする子どもたち」であり、このためには「3つの対話」が重要であると考えている。

すなわち、「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」である。

そこで、図画工作科における「3つの対話」を、教科提案として取り組んだ。

2. 研究の方法

2. 1. 「対話」を引き出す題材設定

低学年は、題材や画材、素材など「対象」に対して、自分なりのイメージを持ち、かかわることを充分楽しむ姿が多く見られる。これらの活動からは「対象との対話」「自己との対話」が多く見られる。

その一方、自分の表現したいものを表現するという教科の特性や、発達段階の特性もあり、友だちと相談したり、一緒に作業したりして何かを制作するという「他者との対話」の活動は活発には見られにくい現状がある。

そこで鑑賞者である「他者」を意識し、「見せる」「伝える」ことをねらいとする題材設定をすることで、「他者との対話」が活発に行われるのではないかと考えた。そのためには、漫画やアニメーションなどの映像メディアの初歩に当たる題材を取り入れることにした。

3. 授業の実際

3. 1. 小麦粉粘土の学習より

3. 1. 1. 授業の概略

第1次は、造形遊びとして、小麦粉の感触を楽しみ、自分なりのイメージをもとに発想した形を作つ

たり壊したりを繰り返し、「材料をもとに造形遊びをする」ことをねらいとする活動をした。

第2次では、立体に表す活動であり、おおよそのテーマや目的をもとに作りたいものを思いのままに表現することをねらいとする。

小麦粉は、子どもにとって身近な材料であり、水を混ぜたり、乾かしたり、火にかけたり、焼いたりすると状態が変化する素材である。また、食品であることから口に入れても安全であるという利点もある。油粘土と違い、水の量を加減することで硬さを調節することができる。

3. 1. 2. 授業の実際

「対象との対話」に関しては、小麦粉の感触や見た目を「ミイラみたい」「雪みたい」など多くの言語化された表現が見られ、小麦粉粘土の練り方や色の付け方、制作にそれぞれの工夫があり「対象」である小麦粉にどっぷりとかかわった様子が見られた。



図1：対象との対話

一方「他者との対話」の「友だちといっしょに何かに取り組む」にかかわっては、3人グループでそれぞれ1人1色の色水を混ぜた小麦粉粘土を練り、それらを交換し合って3色の小麦粉粘土を使うような環境を作った。「相手意識」に関しては、「お客さんが喜ぶクッキーを作ろう」というテーマを設定し、でき上がった作品を見る人を意識した作品づくりができないか考えた。



図2：色を平等に分け合えず、偏りが目立つ

結果は、3人グループに関しては、お互いに協

力し合ったり、交換し合ったりする場面も見られたが、それよりも「自分が練った小麦粉粘土は自分のもの」という気持ちが強く、なかなか交換し合えないグループが多かった。また、相手意識に関しても「お客さん」よりも「自分」が好きなクッキーを作ることに夢中な様子が見えた。

ただ、できた作品をお店のようにディスプレイし、お互いに鑑賞し合う活動では、見せ方を考えて並べたり、折り紙などで飾ったりという工夫をすることができた。



図3：お客さんがほしいと思うディスプレイ

これらのことから、1年生にとっては、「対象との対話」は、発達に合った課題ということができ、低学年の間に多様な対象に出合わせてやることが重要であるということがいえるだろう。だが「他者との対話」に関しては、友だちと協力して制作したり、見せたい相手を意識して制作したりというところまでは到達していない実態が見られた。しかし、意識させたい課題でもある。そこで、「他者との対話」を意識したグループ作りやテーマ設定は必要ではあるが、それが中心課題ではないといえるのではないかと、という仮説を立てた。

3. 2. ソーマトロープの学習より

3. 2. 1. 授業の概略

小麦粉粘土実践での仮説から、今回は「見せたいような、楽しい絵のたし算をしよう」を子どもたちのねらいとし、取り組むこととした。

ソーマトロープは、紙の裏表に描いた2つの絵を、紙を回すことで残像効果により、合成された様に見えるという現象を用いた題材である。はじめ、子どもたちはどうなるのか予想できない状態で、絵を描

き始める。このように、組み合わせた2つの絵のたし算の意外な結果に驚いたり、予想して絵を描いたりする姿を期待した。

円い厚紙に縦に竹串を装着した装置を1人1枚ずつ用意し、その厚紙と同じ大きさの円い紙を子どもたちが切り、思い思いの絵を描き、その中から選んだ2枚を装置の裏と表にクリップで止め、回してみても、どんな絵のたし算ができるのかをどんどん試すようにした。画材は、色合いがはっきりしているサインペンを採用した。

これはアニメーションの初歩の題材である。本題材を第一歩に、パラパラ漫画やフェナキスティスコープ（平面回転絵）、ゾートロープ（回転のぞき絵）など、アニメーションの初歩的な手法につながる。この授業のねらいは「見せたいような楽しい絵の足し算をしよう」である。

くるくる回すと、予想もしなかった結果になったり、予想通りだったり、予想通りになるように位置や色の組み合わせ方を工夫したりした作品は、「他者」である友だちに「見せたい」と思いを持ち、「他者との対話」が進むと考えた。

また、紙を円く切り取ったり、細い竹串を両手で回したり、クリップで止めたりという手の操作を要求している。なかなか線の通りにきれいに円く切り取れない子どもも、絵のたし算をしたいという思いから、諦めずに細かな手の操作にも挑戦していけるのではないかと期待もあった。

絵のたし算で、残像効果のおもしろさに気づいた子どもたちが、もっとたくさんの絵をたし算できないのかなと考えれば、パラパラ漫画などアニメーションの初歩に近づいていき、活動の可能性がひろがっていく。

3. 2. 2. 授業の概略

まず、指導者の見本を見て、土台であるくるくる回す装置作りをした。

その後、制作に取りかかったのだが、初めから見え方を予想して、絵を描いている児童が多かった。位置が思い通りにならずに、クリップをずらして調整する児童は多かったが、裏も表も同じ色を使ってしまい、重なりが効果的でない作品については、その課題に気付いていなかった。

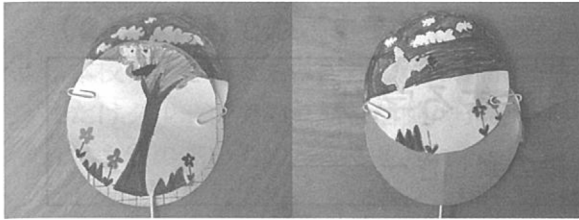


図4：位置をずらして調整

指導者の見本が、鳥と鳥カゴ、鳥とリボンだったため、似た様なパターンの作品が多かった。

この授業で見られた組み合わせは、次の通り。

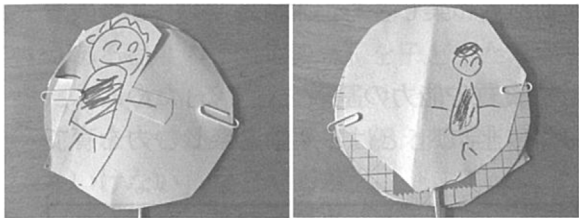


図5：仲良しの友だちと手を繋ぐ

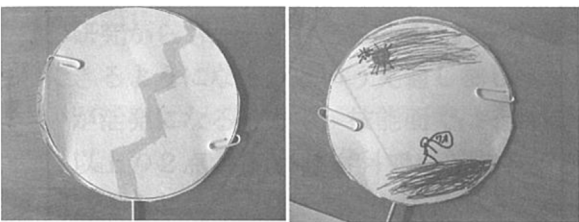


図6：稲妻と晴れた空

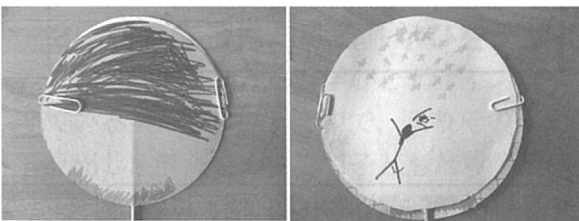


図7：夜空と星

- ・独立した2個のものが関係を持つ
- ・風景に重なる
- ・中心のものに添加
- ・入れ物と中身

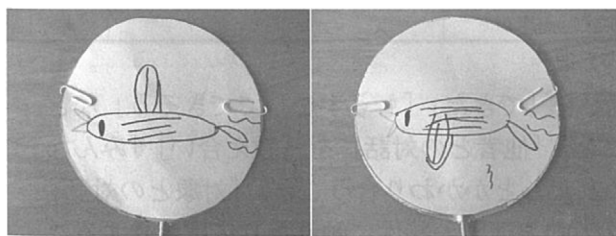


図8：ゆっくり動かすと羽ばたいている

1人だけ鳥の羽を動いているようにしたいという作品があった。しかし、羽の向きを2枚とも下向きに書いてしまったため、動いているようにはならなかった。その後、他の児童もこのアイデアを試行錯誤し、羽の向きを上下にして、ゆっくり動かすと

動いているように見えることを発見した。

4. 授業の考察

低学年における「3つの対話」のうち、「対象との対話」については、小麦粉粘土は感触のよさ、変化の多様さ、安全な素材などの特性から、児童によって違ったかわりが見られ、有効な素材であった。

ソーマトロープは、「他者との対話」について、できたものを見せたいという思いがつながっていくことから有効であったと考える。しかし、友だちの書いたものを貸し借りするのではないかという予想に反し、児童は自分で絵を描いていた。それを見ても、今回取り組んだ題材では、友だちと相談したり協力したりすることよりも、鑑賞者としての他者を意識した「他者との対話」に有効であった。

5. 成果と課題

小麦粉粘土で、造形遊びと作品作りに取り組んだが、「対象との対話」をねらいとする場合は、魅力のある素材選びが重要である。また、多様な素材体験と併せて、1つの素材の多様な特性にかかわりを持ち続けることの有用性に気づいたことも成果であった。

「他者との対話」については、相談や協力という対話のほかに、作品を通して「伝える」という対話が図画工作科では重要ではないかと考える。そのためには、漫画やアニメーションなどのメディア教材が有効であった。その場合、児童は既存のキャラクターなどを多用したがることがあるので、自分だけのオリジナルキャラクター作りの楽しさも併せて感じさせることが大切である。

ソーマトロープでは、位置を合わせる工夫は多く見られたが、色の重なるの効果に気づかせる手立てがなかったため、今後は、重色の効果に気づかせる題材にも取り組みたい。

また、映像メディアには作ったものを「見せたい」という特性があることから、さらに物語性のある作品や、思いを伝えるための作品などにも取り組ませたい。

参考文献 「小学校学習指導要領解説 図画工作科編」 文部科学省